

第15回 1999年度総会



6月3日(木)、朝から小雨がぱらつく中、第15回1999年度総会が、京都アバンティ8Fマリアージュにおいて、会員および来賓者計58名(委任状提出25名)の参加を得て、開催されました。

開催にあたって代表幹事の向園好信氏より、

「最近発表されましたアジア開発銀行調査では、東南アジア7カ国の実質経済成長率が、2年ぶりにプラスになったことや、韓国ではIMF管理下における緊縮経済が成功し、急速に市場を拡大するなど、21世紀に向けてアジア経済は明るい兆しを見せています。

さて、ベンチャービジネスに対する社会的な関心が高まる中、京都市をはじめとして、ベンチャー支援施策が重視されてきましたが、私どもベンチャー企業はこうした支援施策を積極的に活用し、より皆様の期待に答えていく責務があります。

ベンチャー経営は攻めには強いが、守りには弱いといわれています。日本経済はまだまだ厳しく、苦しい経営を強いられるでしょうが、利益を最優先した形が非常に重要になってくると思います。また、京都の産業づくりにベンチャービジネスクラブが積極的に参加し、たとえば、エレクトロニクスや新素材等のハイテク技術と伝統産業の融和により、京都らしさをもった新しい産業を目指すことが大切になってくるでしょう。20世紀から21世紀へと、歴史にこの平成11年度となりますが、皆様のご協力により越えていきたいと思います」という挨拶があり、その後議案審議が行われました。

第1部は規約に基づいて向園代表幹事が議長を務め、(株)田中プリント田中久代氏の司会進行で審議は進行。第2部は国際日本文化研究センター助教授、井上章一氏による講演会が「海を越えた日本文化」をテーマに行われ、海外で見ることができる日本文化を、実際の体験を元に語っていただきました。

第3部の懇親会では、一転して和やかな会場になり、話しに熱が入る会員や、名刺交換に忙しい会員の姿などがあちこちで見られ、盛り上がった雰囲気の中、今年の総会も無事終了となりました。

第1部

●第1号議案

■1998年度事業報告(1998年4月1日～1999年3月31日)

古川副代表幹事より、1998年度の以下のような事業報告が行われました。

(1) 第5回京都ベンチャー大賞
高度な技術力とユニークな発想のもと、常にベンチャースピリットで挑戦するスタートアップ期の企業を表彰する「第5回京都ベンチャー大賞」を実施した。

今回は海外の企業5社を含む過去最多の91社のベンチャー企業から応募があり、大賞(京都市長賞)には、幹線道路の冬期維持管理に関する多目的センサーの開発を行う山田技研株式会社、奨励賞(KVBC賞)には、無溶解アルミ缶リサイクルシステムの開発を行う株式会社ハイネットと家畜糞尿の無汚泥・無臭処理技術の開発を行う株式会社東洋環境技術研究所が、また今回は新たに設けた敢闘賞に、生糸のセリシン定着法を用いた織・編物の生産開発プロジェクトの開発を行う株式会社金久と内分必攪乱物質(環境ホルモン作用物質)のバイオマーカーによる簡便分析システムの開発を行う株式会社クマモト抗体研究所がそれぞれ選ばれた。

表彰式後の「ベンチャーセミナー'98」においては、大阪電気通信大学教授竹田晴見氏に「日本でベンチャー企業は育つか?」と題してご講演いただいた。

(2) 全体会
会員相互の交流、情報交換の場として、「総会」では、「ものづくり・仕事づくりフォーラム」と題し、司会の塗師哲夫氏(中小企業事業団登録カタイザー(株)融合社長)、ハネネーとして、中西幹育氏(アース研究会会長(鈴木総業(株)取締役副社長)、三浦武雄氏(知性連合推進機構会長(株)日立製作所顧問)、檜木俊秀氏(近畿通商産業局産業企画部長)をお招きしてパネルディスカッション、「納涼会」、「国内研修」、「忘年会」、「京都ベンチャーセミナー」の開催の計5回を全体会として取り組んだ。

(3) プロジェクト事業
会員企業が共通して抱える課題解決のために、問題・目的意識を一つにする会員同志が経営する事業として、人材ネットワークプロジェクト事業に取り組んだ。

人材に対する「確保・教育・定着・活用」をテーマに年間を通して研究、実践していくことを目指して、以下の事業を展開。

会員企業22社で、求人情報フォーラムを4月23日に烏丸京都ホテルで開催し、249名の学生の参加を得た。大学との交流が不可欠であるという認識の下、「第6回KVBC産学懇話会」を開催し、会員企業15社と京都市内に本部を置く4年制大学18大学と求人について相互の意見・情報を交換した。

(4) 特別プロジェクト事業
会員の参加活動の促進とKVBCの活性化のため、少人数で研究し、テーマを十分に掘り下げることを目的とした「特別プロジェクト」に取り組んだ。「ものづくり研究会」、「グローバル問題研究会」及び「エコビジネス研究会」が、それぞれの活動を行った。

(5) 研修事業
1998年度は、以下のとおり国内研修、技術セミナーを実施した。

・国内研修：平成10年8月に完成した環境対応型のビルである「京セラ新本社ビル」とビル内にある「京セラ美術館」「ファインセラミック歴史館」の見学及び会社概要の説明を受けた。

・技術セミナー(第12回京都ベンチャーセミナー)：今回のセミナーは株式会社京都産業振興センターが実施するみやこめっせ産業振興セミナーとジョイント開催した。

(6) 新規会員の開拓
KVBCを常に「新しい」クラブとして維持するのにふさわしい会員の開拓を図るため、セミナー参加者などにクラブへの勧誘のPRをし、結果4社の新規入会があった。

(7) その他事業
KVBC機関誌「SHAKE HANDS Letter」毎月2,000部の発行。

●第2号議案

古川副代表幹事より1999年度事業計画(1999年4月1日～2000年3月31日)が提案されました。

新役員体制もと、2年目を迎える今年は、新事業展開や技術開発プロジェクトの発足など新事業の取り組みとともに、ビジネスチャンスの創出・拡大、技術・経営情報の交換や、会員企業の交流によるヒューマンネットワークの構築を図ることを目標とし、以下のとおり本年度の事業を推進することとした。

(1) 全体会
会員相互の交流、情報交換の場として、「総会、納涼会、忘年会、技術セミナー」及びタイムリーな話題、会員企業にとって有益な情報を提供する「月例会」を開催する。

(2) 研修事業
より有益な情報の収集、技術の向上、ビジネスチャンスの創出を図るため、セミナーの実施や、国内及び海外の視察研修、国内外のベンチャー企業の交流団体や企業との交流事業を実施する。

(3) プロジェクト事業
今年度は、「人材ネットワークプロジェクト」をプロジェクト事業として推進する。

(4) 特別プロジェクト事業
興味あるテーマをまとまりやすい少人数で研究することにより、そのテーマを十分に掘り下げるとともに、会員間の交流を深めることを目的として実施する。

(5) 展示会出展事業
全会員が参加する展示会の開催により、KVBCのベンチャーメインの高揚と京都での展示会の足をかりに、次のステップとして首都圏等の開催を目指す。

(6) 広報事業
機関誌「SHAKE HANDS Letter」の定期発行と、KVBCホームページのより一層の充実を図る。また、情報発信の強化を図るため「会員企業名鑑」「パッチ」を発行する。

(7) 新規会員の開拓
KVBCを常に「清新な」クラブとして活力を維持していくため、これにふさわしい会員の開拓に積極的に努める。

第2部 講演会 海を越えた日本文化

国際日本文化研究センター 助教授 井上章一氏

イギリスに『NIPPON』という薬があるのをご存じでしょうか。ロンドンあたりの園芸屋で売っているのですが、何かという、蟻の駆除剤です。つまり庭で『NIPPON』をまくと、蟻が死ぬというわけです。その理由はよくわかりませんが、かつて、フランスの総理大臣クルスンさんが、無趣味で働いてばかりいる日本人を見て、「まるで蟻のようだ」とおっしゃったことがあります。「NIPPON」がフランスでは「蟻」、イギリスでは「蟻退治の薬」というのは面白い仕組み構図です。ワールドカップで、もし日本VSイギリスの試合があれば、日本のサポーター達が「NIPPON! NIPPON!」と叫んでいるのを聞いてイギリス人はどんな風に思うのでしょうか。

名前の話でいえば、面白いのはボストンの『KYOTO』という鉄板焼き屋で、客がその日は自分の誕生日だということ、従業員が東京音頭を踊ってくれるんです。なぜ京都なのに東京音頭なのか、とても不思議です。「さつま」というと日本では、芋を連想しますが、ヨーロッパでは「さつま」とは、ミカンのことです。ロンドンのスーパーマーケットで私も『SATSUMA』とラベルの打たれたミカンを買ったんですが、「メイドインウルクグア」と書いてありました。もっと感動的なのが、グリオのポッキーが、ヨーロッパでは「みかど」という名前で売られています。面白いことに、パッケージが日の丸の旗をバックにポッキーが何本か並んでいて、その上に『MIKADO』と書いてあります。気になって現地のグリオの人に電話取材してみたところ、日本の天皇の名前として「みかど」と付けただけではなく、ヨーロッパで「みかどゲーム」という竹籤を使ったゲームが流行していて、その竹籤にポッキーが非常に似ていることから付けたということでした。それにしてもスーパーマーケットで、みかんの「さつま」と、ポッキーの「みかど」が近くに置いてあったりすると、まるで明治維新のようですね。

ちょっと趣向を変えて、音楽の話をする。「鉄道唱歌」という歌がありますが、この歌と全く同じメロディーで、モンゴルでは女性解放の歌で、韓国では学生の歌になっていきます。なぜか理由はわかりませんが、もう一つ同じようなことがあります。ミャンマーの軍隊が3月下旬、建軍記念日を迎える際に、町に戦車が通るのですが、ビルの両側のスピーカーから流れてくるのは「軍艦マーチ」です。これはおそらく、ビルマがイギリスの植民地支配から脱出する時、戦前の日本で軍事教育を受けた人たちが、反英独立運動を脱出取ったということが関与していると考えられます。

ところで、日本が海外の文化を引用してきたものはいくつかがあります。例えば、あんのパンは、パンと饅頭の文化がドッキングされたものだと思いますが、きっとフランス人が見たら驚くでしょう。たらこスパゲティや納豆スパゲティもとてもおかしな組み合わせだと思います。ところが最近では、海外で日本文化が取り入れられ、組み合わせられるケースが多く見られます。

アメリカにある、牛丼の「吉野家」では、ウェイトレスが食後にコーヒーやデザート注文を聞いてきます。日本では考えられませんが、アメリカでは西洋料理のフルコースとドッキングして、向こうの文化に納まったのだと思うます。

いま私たちは、「豆腐ステーキ」や「豆腐サラダ」という料理を食べることがありますが、あれは元々ニューヨークで作られたものです。豆腐は早いうちからアメリカやヨーロッパに受け入れられていたものが、ニューヨークの料理人達が作った豆腐ステーキなどが、意外に面白いということで日本に再上陸したのです。「照り焼きチキン」もそうです。もともとしょうゆを使う料理法は魚に用いられていましたが、アメリカのコックがチキンに応用したところ、おいしかったので日本で受け入れられたのです。

こういうことはよくあります。「カップヌードル」もそうです。日清食品のカップヌードルは、もちろん日本で作ったものですが、カップ麺はアメリカ用に販売されたものです。即席ラーメンは、どぶろ餅が鉢ごと売ればよいという考えにたどり着いた結果、カップ麺になったのです。おかげでどぶろ餅がない文化圏でもカップ麺が普及してしまいました。

海外で見かける日本文化に、少し変わって伝わったものがあります。初めてそう思ったのは、フロリダで見たたい焼きの中身がレーズンだったことです。現地人にあんこが合わない、おそらく中身を替えたのでしょう。また、オランダのハーレンという町の、ある中華料理店では「いなりずし」というメニューがあり、それを頼むと、四角い豆腐の中にご飯が入ったものが出てくるそうです。これらは再び日本で受け入れられるという事は考えにくいですが、いずれにしても、日本と海外の文化がドッキングして、どんなものが入ってくるかわからないという面白さがあります。

私の知り合いのインド人が、ベンガル語で俳句を詠んでいて、日本の俳句の翻訳もしているのですが、難しいことが多々あるようです。例えば、松尾芭蕉の「夏草や強者ども夢が夢」という俳句がありますが、彼の住む地域では、夏は暑くて草が全部枯れてしまうため、「夏草」の趣が理解できないということでした。俳句は今や世界中に普及していますが、英語や漢文などの俳句もあります。季節などはめちゃくちゃですが、おそらく世界中で日本では想像できないような俳句ができてきていることでしょう。

話の方向を変えますが、さくら銀行ロサンゼルス支店前広場に、二宮次郎の彫像が立っているのをご存じでしょうか。出店する際にロス市からの許可はすぐ出たものの、代わりに広場にロス市を記念するモニュメントを置いてほしいという依頼がありました。そこで、銀行側が地主の日系2世の人に相談し、二宮金次郎像を建てようということになりました。図面を書いてロス市に提出したところ、許可がおりなかった。ところが許可が下りないままに発注が行われてしまったのです。ロス市はすぐに撤去命令を出しましたが、この命令がロス在住の日系社会に火を付けてしまいました。日系の若者が、每晚二宮金次郎像の回りを囲んで数ヶ月間守り通しました。あわてたロス市が公聴会を行い、承諾され今に至っています。

二宮金次郎というと、台北の絵本に孔子の人生を描いたものがありますが、それによると孔子は小さい頃、背中に柴を背負って本を読んでいるのです。つまり、いつの間にか孔子の人生が二宮金次郎になっているのです。しかし実をいうと、私は二宮金次郎のルーツはイギリスにあると思います。「The Pilgrim's Progress(天路歷程)」という宗教書があるのですが、その本の第1項目に出てくる少年のイラストは、背中に大きな荷物を背負って本を讀んでいる。これが明治19年に日本語に翻訳されました。イラストもそのままです。評判がよかったのか、後に再版されます。そこでは男が和服になっていました。2年後、幸田露伴が「二宮尊徳王」という絵本に初めて柴を背負って本を読む二宮金次郎が出てきます。あの姿は文獻的な根拠がないのでおそらくルーツはイギリスではないかと思えます。そうするとジョン・パニョンが明治時代の二宮金次郎の人生を変え、その二宮金次郎が台湾の孔子の人生を変えたこととなります。私はこういうイメージの世界史に感動しています。

また話が変わりますが、「フランダースの犬」という話がありますが、ベルギーのアントワープの観光案内所に行くと「あのフランダースの舞台になった場所はどこか」という日本人が結構いるようです。しかし、実際アントワープにはフランダースの犬の舞台になった場所はおろか、話自体を知っている人はいませんでした。あまりにも問い合わせが多いので地元の人が、フランダースの犬の像を立てたんです。あそこはフランダースの犬の話がもとで自然に像が立ったわけではなく、あまりに日本人の問い合わせが多かったので像が立った、つまり、「海を越えた日本文化」なのです。

日本の文化は海外でどのように変形されやすいのかという一般論を学問的に語るどころ、小話一覧のようになりましたがこのように、日本の文化が海を渡ることで、また新たなものが生みだされていることも、一種の「ものづくり」という点ではどこかベンチャーにつながっているのではないのでしょうか。

第3部 懇親会

幹事の井上氏司会のもと、第3部懇親会が行われました。開催にあたって、大橋副代表幹事のあいさつ後、来賓祝辞には京都市産業観光局商工部 島田部長、京都府商工部産業推進課 阿部課長より、乾杯の音頭は(財)京都高度技術研究所専務理事の大石氏より行われ、会場は和やかな雰囲気になりました。